

幼年教育研究部会

I 研究テーマ

「いきいきとともに育つ子どもをめざして」

II 研究テーマ設定の理由

近年、子どもたちが育つ環境は社会状況や生活様式の変容とともに、大きく変化してきている。少子化、核家族化、地域の教育力の低下などにより、家庭はますます孤立し、不安や閉塞感の中で子育てに悩んだり、放棄したりする保護者も増えている。

このような子どもを取り巻く現状を反映してか、集団の中で人間関係が上手に築けない、集中力に欠け、落ち着いて物事にとりくむことができない、情緒不安定になり、ちょっとしたことでパニックを起こすなど、「小一プロブレム」に象徴されるような問題も、だいぶ前から取りざたされている。

幼年期は、人としての基礎が作られる大事な時期である。同年代の子どもとの関わりはもちろん、異年齢の子どもたち、大人、お年寄りなど様々な人に出会い、様々な活動を通して成長していく。その経験の中で、自立心や好奇心、自己肯定感が育っていくと考えられる。

そこで、今年度も「いきいきとともに育つ子どもをめざして」という県教研のテーマを受け、幼年期の子どもたちの指導について、教科、特別活動、道徳など様々な活動の中で考えていきたい。子どもたちが互いに理解し、関わり合う中で育っていくという考え方に立ち、いきいきと伸びやかに生きる子どもたちの姿をめざしつつ、子どもたちの育ちをどう支えていけばよいかを実践し、学び合っていきたいと考えて、上記のテーマを設定した。

III 研究経過と内容

1 研究経過

4月11日	第1回研究会	今年度の部会運営について
5月14日	第2回研究会	研究計画について
6月18日	第3回研究会	実践報告 ・千塚小学区保幼小連携教育推進委員会（第1回）の内容報告（千塚小）
7月31日	第4回研究会	実践報告 ・「まちをたんけん 大はっけん」 ～朝日通り～ （新紺屋小） ・千塚小学区保幼小連携教育推進委員会（第2回）の内容報告（千塚小）
8月16日	第5回研究会	保育士体験（部会員4名参加） 於：甲運第一保育所
9月 3日	第6回研究会	実践報告 ・「なかよし学年 1年生との交流」 （大國小）

- ・「わたし発見」プロジェクト ～ドリームマップづくり～ (大里小)
- ・「保育士体験をして」 (甲運小)

10月1日	第7回研究会	県教研報告レポートの検討
11月5日	第8回研究会	県教研還流報告
1月21日	第9回研究会	研究のまとめ

2 研究内容

(1) 部会員相互の実践報告

一人一実践のレポート提案により、保幼小の交流、他学年との交流、授業づくり、学級づくり、地域の方々との交流など、いろいろな角度から子ども同士の学び合いをとることができた。また、部員相互のていねいな情報交換や実践交流ができ、学級・学年の枠を超えた活動の良さや自己肯定感を育むことの大切さを知るよい機会となった。

(2) 保育士体験

- ①日時 平成25年8月16日(金) 9:00～13:30
- ②場所 甲府市立甲運第一保育所(甲府市川田町121番地)
- ③ねらい ○保育士体験を通して、幼児期の指導のあり方を知る。
○保幼小が連携することによって、小学校低学年の指導に生かす。
- ④流れ 9:00～ 打ち合わせ
9:30～ 自由遊び(水着に着替え→どろんこ遊び→プール遊び)
11:20～ 着替え・休息・朝の会
11:30～ 給食準備・給食
12:30～ 片づけ・排泄・歯磨き・お昼寝準備
13:00～ お昼寝・職員と懇談



⑤体験を終えて～保育士との話し合いから～

園児がお昼寝をしている間、所長と主任保育士と懇談の機会をいただいた。保育士が保護者や園児とのやりとりの中で感じていることや、就学前の年長児の指導について悩んでいることを話してくださった。また、私たち小学校教職員となかなか話す機会がもてない中、交流の機会ができ良かったと、感謝の言葉も聞かれた。小学校側からは、就学後の園児のようすや、課題点について話し、お互いに子どもの育ちをつなぐための共通理解を図ることができた。

<就学前後の指導について>

○保育所でも、ひらがな指導など行っているが、幼稚園と保育所の指導の仕方に違いがあるのではないかと、就学後の勉強についていけるか、不安を訴える保護者が多い。保育所としては、ひらがなの習得以前に学ぶこととして、話の聞き方や、友だちとの関わりについて重点的に指導していきたいと考えているが、どんな点に注意して指導し

ていけばいいか、質問が投げかけられた。

☆小学校教職員からは、新入児たちの就学後のようすを話しながら、スムーズでなめらかな入学ができるよう、四点について就学前後の指導の共通理解を図った。

- ・話の聞き方
- ・時間の切り替え
- ・友だちとの関わり
- ・前向きにとりくむ姿勢

<保護者との関わりについて>

○保育所では、お迎え時に毎日保護者と顔を合わせ、園側からは、その日の出来事や、お願いしたいこと、保護者からは、子どもの体調、家庭の事情など、お互い密に話すことができ、関係の深さがある。しかし、小学校の担任とは、話しづらいという悩みを、入学後、保護者が保育士に打ち明けてくることがある。そのときは、小学校と保育所との違いを説明して、理解をしてもらうように努めている。小学校としては、保護者の思いを少しでも受け止められるように努めていきたい。

<幼児期からの習い事について>

○幼児期から習い事を始める園児が多くなり、中には、スケジュールに追われ、子どもに過度の負担がかかっている事例が話された。

☆学校生活の一日の流れを身につけさせることが、今後の長い学校生活の礎になると考える。保育士、教職員、保護者が共通理解を図りながら、子どもたちの育ちを支えていくことが大切であると確認し合った。

IV 研究の反省と課題

各レポートや保幼小の交流・連携教育を通して、さまざまな人たちと関わっていくことが自主性や社会性、豊かな心を育てていくために有効であることが分かった。今後もいろいろな場面で関わり合う活動を取り入れることによって、弱者へのいたわりの気持ちやリーダー性、自己の成長の確認や感謝の気持ち、学び合いの精神を育てることができると考える。

保幼小の連携においては、子ども同士の交流もさることながら、保育士や教職員同士の連携をいかにとっていかも重要である。交流や対話の場で、まず、保幼小それぞれの現場に携わる者の「子どもの見方、受け止め方の違いに気づく」ところからスタートし、徐々に「関わりの質や量を向上」させていくようにしたい。甲府市の場合、一校当たり複数の保育園・幼稚園の子どもたちが入学してくるため、そのすべてと相互理解を図ることの難しさはあるが、情報交換にできる限りの時間を費やす努力はしていきたい。

今年度は5名という少人数の部員ではあったが、それぞれが学級で抱えている課題を念頭におきながら研究会や保育士体験に参加することができた。子どもの成長を長いスパンでとらえ、幼年期にはどんな力を養う必要があるのか、また、子どもの個々の違いを認識し、もてる力を高めるための交流活動や授業づくりなど、さらに実践を重ねながら「子どもの育ちを支える」「子どもの育ちをつなぐ」活動を保障していきたい。